

障害当事者とその親の成長に伴う経験と心情 —先天色覚異常者とその親の語りの質的検討—

富田久枝¹⁾ 岡田あずさ²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部幼稚園教員養成課程（幼児教育教室）教授

²⁾千葉大学・教育学研究科・修士課程学校教育科学専攻教育発達支援系学生

Experience and feelings with the growth of a handicapped people and their parents;

Qualitative examination of the talk people with a color vision disability and their parents

TOMITA Hisae¹⁾ OKADA Azusa²⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University National University Corporation,
The Training Division for Kindergarten Teachers, Professor

²⁾Master's Program, Graduate School of Education, Chiba University, Education Development Support System,
Division of Educational Science, Student

本研究は、先天色覚異常者とその親の成長に伴う心情変化を明らかにすることを目的とした。その結果、先天色覚異常者は、将来を見据えて進路を考える際に、大きく心情が左右されたとしていたが、現在は色覚に異常があることを前向きに受け止めようとしていた。また、親は、診断に対するレディネスの有無によって、診断直後の受け止め方に違いが見られた。そして、子どもの自立した姿を見ることで、子どもに対する不安や心配がなくなっていた。

The purpose of this study is to clarify the change of feelings with the growth of people who have a color vision disability and their parents. People with a color vision disability had been nervous when they decide their future, however they came to be positive for having a color vision disability. Their parents were shocked when they did not notice the abnormality of their child. But they accepted the diagnosis. Thus the readiness to the diagnosis was important.

キーワード：先天色覚異常 (Congenital color vision defect) 心情 (Feelings) 変化 (Change) 親 (Parent)

1. 問題と目的

先天色覚異常は見た目では分からないという障害の特徴を持つ。その特徴のために周囲からの理解が得られず困難を経験することが予想される。また障害当事者の心情についての研究は非常に少なく、先天色覚異常者の心情についての研究は見つけられなかった。しかし障害児・者の母親の心情についての研究は多くなされていた。山根 (2012) は、人生に対する子どもの障害の意味づけの特徴について、「自己の成長への価値づけ」「子どもへの感情」「障害の位置づけ」の3つの視点から分析を行った結果、「成長・肯定型」「両価値型」「消極的肯定型」「自己親和型」「見切り型」「希薄型」の6つの意味づけの類型を得ている。この結果に対して、山根 (2012) は、子どもの障害に対する社会的意義や障害の視点を越えて子どもの全人格の肯定的側面を見出すことが、母親が障害のある子どもをもつ経験を人生に肯定的に位置付けていくことにつながるのではないかと考察している。また、一瀬 (2011) は、〈自己のポジショニング〉の変容プロ

セスには、『再生』『逃避』『獲得』『境界』という異なる4つのストーリーを見出している。そして、変容プロセスに関連する要因は、子どもの障害特性に関連する事象と他者との関係の2つであることが明らかになった。以上から、障害を持つ子どもの親の心情が、障害の人生への意味づけについても、〈自己のポジショニング〉の変容プロセスについても、さまざまな類型・様相を示すということがいえるかもしれない。

また、障害のある子どもをもつ母親のストレッサーに関する研究において、坂口・別府 (2007) は、障害固有のストレッサーとして、就学前の自閉症児の母親のストレッサーには「愛着」が存在することを明らかにしている。このことから坂口・別府 (2007) は、愛着形成に困難さを感じている母親は、周りに「理解されていない」と感じている場合が多いと考えた。また、非自閉群にも、「サポート」と「否定的感情」という因子がストレッサーであったことから、この2因子は障害の種別を越えて存在するストレッサーであると考えられていた。そして、坂口・別府 (2007) は「否定的感情」に関して、竹内 (2000) の研究を取り上げ検討している。それによると、子どもに障害があるのは「母親のせい」と言われた人の割合が、

連絡先著者：

自閉症や多動性障害児をもつ母親の場合50%以上にわたっていたということから、目に見えにくい障害をかかえた子どもとその母親に対する無理解はさらに大きいと考え、母親自身が自分を受け入れ子育てができ、心身が健康でいられるような支援を考えていく必要があると考察している。また、阪木（2005）は、子どもの障害の程度が重度群の母親が軽度群の母親よりも心的ストレスが高い傾向にあるということを示しているが、発達期待感の因子においては、重度群のほうが軽度群よりもストレスが低いという結果が出ている。このことについて阪木（2005）は、障害としての理解のされにくさや、母親自身の問題性の把握の不十分さなど、軽度ゆえの難しさやジレンマがあり、そのことにより重度よりも軽度の方が心的ストレスが高い傾向を示したと述べている。

以上から、目に見えにくい障害を持つ子どもの母親や障害の程度が低い子どもの母親は、周りからの理解を得られにくく、一目見てわかるような障害とは質の異なるストレスを感じることがあるといえるのではないだろうか。

色覚異常者の心情を明らかにすることは、障害当事者からの視点で、目に見えないという障害の特徴に伴う困難さを理解することを可能にし、さらに、その理解をもとに障害特性に応じた支援を考えていくという点で、有意義であると考えられる。また同時に、色覚異常者の親の心情についても明らかにすることで、親の複雑な心情を理解することができ、障害の特性に合った親子への支援を考えていけるのではないかと考えた。

以上から、本研究では、色覚異常があることでどのようなことを経験しその時の心情はどのようなものであったか、そして、成長に伴ってどのように心情が変化していったのかを明らかにすることを目的とし、色覚異常者本人同士、色覚異常者の親同士を比較しながら考察していく。

2. 方 法

対象は、先天色覚異常者4名と先天色覚異常者の親2名であった。平成25年8月～10月に半構造化面接を実施した。対象者の承諾を得て、ICレコーダーに面接内容

を録音した。面接時間は1人30～60分であった。

データの分析は、辻・大西（2012）が用いた分析方法を参考にした。半構造化面接によって得られたデータから逐語録を作成し、対象者ごとに診断から現在までの体験を時系列で整理した。どのように診断から現在までの体験が構成され、どのように意味づけているかを分析した。

3. 結果と考察

(1) 対象者の概要

面接は先述のように、研究者の知り合いに口頭と文面で依頼を行い、了解を得た上で面接調査を実施した。対象者の概要は以下に記し、Table 1に示す。

色覚異常者を「子」とし、その親を「親」として番号を付けた。番号が同じ2人は親子である。色覚異常者すべての性別が男性で、面接時の年齢が22歳であった。子一1（以下Aさん）と子一2（以下Bさん）は大学院1年生、子一3（以下Cさん）は大学4年生、子一4（以下Dさん）は社会人である。

親一1（Xさん）、親一2（Yさん）ともに母親である。Xさんは息子が2人とも色覚異常者である。AさんはXさんの次男である（◎）。

診断時期はAさんが小学校低学年、Dさんが中学3年生であった。Bさんは診断の記憶はないものの、中学生の時に親から色覚異常であることを告げられている。Cさんは姉のコンタクトを作りに行った際に石原式検査表を眺めていて分からなく、医師に色覚異常だと言われた記憶があるが、正式な診断であったかは覚えていないため、その時期を認識時期とした。

Xさんは息子が年子であるため同時期（長男小学5年生、次男小学4年生の時）に2人の診断を受けている。YさんはBさんが小学2年生の時に診断を受けている。

個人の語りの中にある色覚異常に対する気持ちや捉え方に注目するため、子と親の診断時期のずれは重要視しない。

(2) 色覚異常者本人の心情の変容

筆者が読み取った語りのテーマは【 】内に、主な時

Table 1. 対象者の概要

	子					親		
	名	性 別	年 齢	診断時期	認識時期	名	子との関係	診断時期
1	Aさん	男	22歳 大学院1年	小学校 低学年		Xさん	母	長男 小学5年生 ◎次男 小学4年生
2	Bさん	男	22歳 大学院1年	記憶なし	中学生	Yさん	母	小学校 低学年
3	Cさん	男	22歳 大学4年	記憶なし	高校1年生			
4	Dさん	男	22歳 社会人	中学 3年生				

期は〈 〉内に、実際の発話や記述は「 」内に、語りや記述を補足する内容は（ ）内に示し、テーマごとに筆者の考察を述べていく。

①Aさんの心情の変容

a. 【色覚異常という診断】〈医師からの診断後〉

Aさんは医師から診断されるまで、色覚に関して気になることはなかった。Aさんは医師からの診断に対して、「特に何も思わなかった」と述べていた。しかし診断に至るまでの検査で、「こんなに見え方って違うんだ」と自分の見え方に驚いている。

子一1は色覚異常という診断を受けても、診断前に色覚の異常を自身で感じていないため、診断に対して特出した思いとならなかったと考える。また、自分の見え方に驚いていることから、この時に自身の色覚の異常が意識化されたのかもしれない。

b. 【自分と他者は違うと強く意識させられる】〈色覚異常とわかってからの小中学校時代〉

Aさんは、母親の「あの信号は何色?」「あの看板は何色に見える?」などの質問に対して、「わずらわしい」と感じていた。母親の質問によって「自分と他の人が違うんだ」と強く意識させられ、「複雑な気持ちになった」と述べていた。

Aさんは母親の自身の色の見え方への強い関心によって、他の人との違いを意識させられたため、Aさんにとって色覚異常であるということは、他者と違うということであったと考えられる。

c. 【先生からの励まし】〈高校時代〉

Aさんは高校の美術の先生に自分の色づかいに対する不安を伝えた際に「色づかいとしておかしくないし、むしろデザインとして素敵だと思います。(色覚異常でも)何も不安に思うことはないですよ」と言ってもらえたと語った。Aさんはこの先生の親切な言葉に「自分の事をしっかりと考えてくれているんだな」と嬉しさを感じていた。

美術の先生からの言葉は、他者との違いを強く意識していたAにとって、それを軽減させるものであったと考えられる。したがって、不安な気持ちを理解し、寄り添うことの大切さが示唆される。

d. 【色覚異常の研究をしている研究室】〈大学入学前・研究室配属の時期〉

Aさんは大学入学前に色覚異常について研究している先生がいると聞き、「治療方法とか矯正する手段について期待した」と述べている。そして研究室配属の際、「自分の色覚異常が大きなファクターになって進路を決定した」と語った。また、この時期が一番気持ちが左右されたとしている。

Aさんにとって色覚異常であるということは、自分の進路を決定づける大きな要因として意味づけられているのではないだろうか。

f. 【ちょっとしたデメリット】〈現在〉

Aさんは色覚異常であることを「そういう(色を見分ける)」という能力に劣っているだけ」と捉え、大きく問題視していないという点で考え方は変わっていないと語る。

Aさんにとって色覚異常は「能力に劣っているだけ」

のことであり、不便に思うことはあるが、自身の個性として受け止めていると思われる。また、Aさんは色覚異常について研究することで、色覚異常であるという事実を客観的な視点から見ることができるといことも、このような捉え方に影響しているのではないかと考える。

②Bさんの心情の変容

a. 【自分の認識する色彩を考える】〈親から色覚異常であると告げられた後〉

Bさんは中学生ごろに親から色覚異常であることを教わる。色覚異常であることを「気にすることはほぼありませんでした」とし、「むしろ、自分の現在認識している色彩が他人と違うことに対し、眼球の構造、光の屈折などがどうなっているのか興味を覚えました」と述べた。

Bさんは色覚異常を自身の見え方からどういうものであるのか捉えようとしていたと考えられる。Bさんにとって色覚異常とは興味を覚えさせる不思議なものであったのではないだろうか。

b. 【将来を考える】〈高校受験で将来を意識した時〉

Bさんは中学生の時、受験という形で初めて将来を意識する。「普段生活する上では何の障害にもなりません」としながらも、「就職先を考えたとき、自分がなりたいものになれないかもしれない可能性がある」ことを知り、「自分の意識を少し操作していかなければならない」と思っていた。

Bさんはこの時、色覚異常であることで不便さを感じていなかった。しかし、色覚異常が後の職業選択に困難をもたらすものと考えていたのではないかと。したがって自分の将来への意識を操作しようと思ったと考えられる。

c. 【自分を構成するファクター】〈現在〉

Bさんは現在、色覚異常を「色覚異常に対する周囲の認識を確認」するときの「道具の一つ」と捉えている。そして「自分を構成するファクターの一つ」として「自分の人生に有効に使おう」と考えていた。

Bさんは、色覚異常を「道具の一つ」とコミュニケーションの手段として考えているようであった。自分にとってマイナスにもプラスにもなるとは考えておらず、身体の一部と同じようなものとして捉えられていると考える。

③Cさんの心情の変容

a. 【自分の個性】〈医師に色覚異常だと言われた後〉

Cさんは高校1年生の時、姉がコンタクトレンズを作りに行く際に付き添いでついて行った。そのときにたまたま見ていた検査表が分からず、医師に色覚異常であると言われたことで、自身が色覚異常だと認識した。以前から黒板の赤文字が見えないことがあったが「気にしなかった」そうである。医師から色覚異常だと言われ、「これはこれで自分の個性だと思った」と述べている。

Cさんが「自分の個性」と思ったのは、色覚異常と言われようが言われまいが見え方が変化するわけではないという事実からではないだろうか。

b. 【色覚異常の先生との出会い】〈高校の授業の時〉

Cさんは高校生の時に、同じ色覚異常である先生に出会う。その先生は授業の前に『「俺は色覚異常だから」』と色覚異常についての話をし、『「絶対に赤を使わない」』と話し、「赤チョークを絶対に使わなかった」そうだ。

Cさんはこのことについて、「同じ障害を持つ人への配慮をしてくれている」と感じ、先生に対して「近いな」とも感じていた。

c. 【自分の個性】〈現在〉

Cさんは色覚異常と医師に言われたときも「自分の個性」として受け止めているが、現在も「自分の個性」として捉えている。しかし、以前と違って、自身が色覚異常だと感じる出来事が起き、「人と見えている世界が違うのかな」と思い、「積極的に前向きに受け止めてる」と語っていた。

Cさんは色覚異常ということ、ただ色が見えにくいということというよりは、「人と見えている世界が違う」、つまり自分独自の色の見え方があると捉えているようである。

④Dさんの心情の変容

a. 【友達との色の識別の違い】〈医師から診断される前〉

Dさんは医師から診断される前に友だちと色の識別で言い争うことがよくあった。「自分が色覚異常者なのかもしれないってわかってからは、あ、そうだよな。自分間違ってるよな」と思うようになり、「色を言葉にして言うのが怖い」と思うようになったと語った。医師からの診断直前も「自分は色覚異常なんだろうな」と不安を感じていた。

Dさんは友だちとの違いから徐々に色覚の異常を自覚していった。その自覚していく過程で、「違い」を「間違い」と消極的に捉えるようになり、不安を感じるようになったと考えられる。

b. 【予想どおりの診断と説明に対する不足感】〈医師からの診断後〉

Dさんは色覚異常という診断に対して、「やっぱり」と感じる。しかし医師の説明に対し、「僕としてははっきりしてほしかったなっていうのはありますね。なんかあんまり知識がなかったの…」と語っている。

Dさんは、色覚異常かもしれないという不安があったため、診断に対しては「やっぱり」と落胆に近いような受け止めをしていると考えられた。また、色覚については診断前から気になっていたため、診断名だけでなく、自分の見え方についてより詳しい説明を求めているのではないだろうか。

c. 【就職活動できる企業が減る】〈就職活動中〉

Dさんは大学3年生の時に就職活動をしている。就職活動を始めて興味のある企業の募集要項を見ていると、色覚の検査があり、断念するということを経験していた。また実際にある企業を受けた時に色覚検査をして引っかかっていた。そのことに対して「残念な気持ち」と語っていた。しかし、色覚異常があることによって就職活動の幅が狭くなることについて「しょうがないかな」とも思っていた。

Dさんにとってこのとき、色覚異常は就職活動の幅を狭めるものとされていたと考えられる。しかし「しょうがないかな」とも思っていることから、色覚異常であることを多少受け止めながら就職活動に取り組んでいたと考えられる。

d. 【ネガティブな中にもポジティブな希望】〈現在〉

Dさんは現在色を取り扱う仕事をしている。その仕事

で「この色なんだろう」と「不安」を感じると語っていた。現在は色覚異常であることを「ネガティブ」に捉えているが、昔に比べれば「少しはポジティブに考えられる」とし、「なんかの形でこれは自分にしかできない（ということ）があれば（いいな）」と期待を持っていた。このようになったきっかけは、世界的に有名な「サッカーのメッシが病気を持ちながらも、そのおかげで今があるみたいな感じの話」をしていたことであった。

Dさんにとって色覚異常は自分に困難を伴う経験を多くもたらしたためにネガティブな捉え方となったと考えられる。しかし、病気を持ちながらも活躍するメッシの考え方に感銘を受け、希望を見出したと考えられる。

(3) 色覚異常者の親の心情の変容

筆者が読み取った語りのテーマは【 】内に、主な時期は〈 〉内に、実際の発話や記述は「 」内に、語りや記述を補足する内容は（ ）内に示し、テーマごとに筆者の考察を述べていく。

①Xさんの心情の変容

a. 【診断の程度が軽度であることを祈る】〈医師からの診断前〉

Xさんは学校での色覚の検査がある前に、「(テレビ番組)を見ていたとき、茶色の温泉まんじゅうを食べるシーンで『あのみどりのおまんじゅうおいしそう』といった時、あれ、この子！？と思った。」と色覚の異常について気になる経験をしていた。そのため学校から「異常の疑いあり」と通知が来たときに「やっぱり」と思っていた。その反面、医師からの診断に対して「程度が心配でした」と言っている。そして「軽度と診断されることを祈っていました」と述べていた。

検査の前に子どもの気になる言動があったため、通知がきたときには色覚異常であることを納得したようであった。しかし、程度を心配していたことから、色覚異常が重度であると大変という認識をしていたと考えられる。

b. 【子どもの将来】〈医師からの診断後〉

Xさんは診断時に医師から「将来は、運転免許もOKだし、今は医師にもなれると安心させていただけのような言葉」をもらっていた。しかし、「漠然と、職業的には制限があるだろうと逆に心配になりました」と述べ、将来に訪れるであろう「何かしらのハンデ」を心配していた。また、「このハンデが妨げになるような職業を望まないでほしい」と願っていた。

Xさんは色覚異常を持つ事は、将来に影響する可能性があるハンデと意味づけしていると考えられる。また「漠然と」と語っていることから、障害に対する知識のなさということが不安や心配を増大させる要因となるのではないだろうか。

c. 【色覚異常に関する研究をしている研究室があることを知る】〈次男の大学入学前〉

Xさんは次男の大学が決まった後の大学の説明会の資料で、色覚異常に関する研究をしている研究室があることを知った。そこで、Xさんは次男が現在の大学に来ることになったことを「なあんだ、やっぱり運命だったんじゃない」と思っていた。大学3年生で研究室を決める際

に、「俺そういうの興味ないから行かない」と言っていた。次男がその研究室に行くと、兄つまり長男から聞いたときは「嬉しかった」と語る。

Xさんは次男が色覚異常について研究するようになったことを「運命」としている。次男が色覚異常について研究することで、色覚異常について何かしらの成果を上げることが期待していたのではないだろうか。または、次男が色覚異常という事実を受け入れ選択したということに喜びを感じたのではないかと考えられる。

d. 【他の子どもたちの不便さを考える】〈次男が色覚異常に関する研究をするようになってから現在にかけて〉

Xさんは「色覚異常の子どもたちの不便さを思うようになりました」と述べている。「でも見えなくて、自分は目が悪いんだと思って、困っている子がもしかしたらいるかもしれないなあ」と考えていた。また、そのような子どもたちに対して、「異常があっても大丈夫だよ」と安心させるように言いたいと言った。そして、次男が色覚異常に関する研究をしているということもあり、「(色が分からない) 子どもたちに色を取りもどす技術が開発されること」を願っていた。

Xさんが自身の子ども以外の子どもが色覚異常を持つ事による不便さを考えるようになったのは、小学校に絵本の読み聞かせをしに行くことで、子どもたちについて考える機会があるからであると考えられる。また、次男が色覚異常に関する研究をしているということもよりその思いを深めているのではないだろうか。長男と次男が色覚異常を持ち、困難を経験しながらもそれぞれの人生を歩んでいることから、色覚異常を持っても「大丈夫」という考えに至ったのではないだろうか。

②Yさんの心情の変容

a. 【正常であることが当たり前】〈医師からの診断前〉

Yさんは学校からの通知に「まさか!？」と思い、「ショック」を受けている。また、「当然のように、異常なしという結果が来ると思っていた」と述べた。

Yさんは小学校からの通知が来る前に、子どもについて色覚に関して気になるようなことを経験していなかったため、色覚が正常であると思っており、通知が来たときに衝撃を受けたのだと考えられる。

b. 【診断前とは変わらない子育て】〈医師からの診断後〉

Yさんは医師から「ごく軽い色覚障害」と診断され、「将来、この障害によって就職できない職業がある」と説明を受けた。それに対して、「戸惑い、ショック」を受けている。しかし、Yさんは色覚異常だと診断を受けた後、子どもに色覚異常であるという事実を伝えたが、以前と変わらず子どもの「好きなことを伸ばしていこう」と考えていたと述べていた。また、「絵を描いたりとか全然異常を感じないので」、「能天気にならないうえに」と述べていた。

Yさんは色覚異常という事実「戸惑い」や「ショック」を感じているが、色覚異常に特化した子育ては考えていなかった。実際の日常の生活で異常を感じなかったことが影響していると考えられる。

c. 【社会の変化】〈色覚異常へのショックが薄らいでいっ

た時期〉

Yさんは「通知が来たときや医師からの診断が来たときは戸惑いましたが少しずつ薄らいできました」と述べた。戸惑いが薄らいだ具体的なきっかけはないとしながらも、「全盲の人が医者になったり、ピアニストになったり…社会の変化も影響しているかもしれません」と述べた。

Yさんは子どもが色覚異常であるということに対する戸惑いは少しずつ薄らいでいったとし、社会の変化をその影響として考えていた。障害を持っても、能力を大いに開花する可能性はあるということを全盲のピアニストたちから感じていたのかもしれない。また、先述したように、子どもの色覚異常の程度が軽く、忘れるほど日常で困難を伴うことが少なかったことが理由として考えられる。

d. 【見守る】〈現在〉

Yさんは、子どもが「自分なりに自分の道を、自分の努力で進んでいる」ため「普通の親と同じように、ただ見守っています」と述べ「今はさほど心配していません」とも述べている。また、「色覚(異常)だからとかいうんじゃないで、自分で一生懸命頑張る道に今行きつつあるのでそれは良かったかな」と語った。

Yさんの「他の親と同じように」という記述から、Yさんの子育てでは色覚異常を意識したものではないということが伺える。また、子どもが色覚異常を意識して進路を決めたわけではなく、やりたいことを一生懸命にやっていることに、Yさんは「よかった」と思っていることから、現在の子どもの姿に心情は影響を受けているのではないかと考えられた。

4. 総合考察

色覚異常者やその親の心情について分析を行っていくと、対象者それぞれの心情や色覚異常に対する考え方の変容が明らかとなった。また、同じ色覚異常者であっても、同じ色覚異常者の親であっても成長に伴う心情やその変容はさまざまであった。

Aさんは診断前に色覚の異常に対して自覚がなく、Dさんは色覚の異常に対する自覚があった。また、Aさんは診断直前に漠然とした「不安とわくわく」を感じ、Dさんは色覚異常という診断をされるかもしれないことに対して「不安」を感じていた。このことから診断前の色覚の異常の自覚が診断直前と診断直後の心情に影響すると考えられた。また、現在、色覚異常者の4人中3人が自身の色覚異常について問題視していなかったが、Dさんのように色覚異常であることを「ネガティブ」と捉えている人もいる。人生のターニングポイントとなるような、進路や就職先の選択の際には多くの困難を伴うことがあることを予想して、色覚異常者の気持ちに配慮する必要があると考えられた。そしてDさんは色覚異常であることに対してネガティブな中にもポジティブな期待を持つようになったきっかけとして、病気を持ちながらも世界的に活躍しているメッシをあげた。このことから否定的な心情から肯定的な心情への変化に大きな影響を与えるものとして、自身と同じような境遇の人物の存在

があるのかもしれない。

また色覚異常者の親については、通知や診断に対して、自身の子どもとは対照的な心情で「ショック」や「不安」を感じていた。このことから、色覚異常に関しては、診断時において親のサポートが重要であると考えられる。また、Xさんは学校から通知が来る前に子どもの色覚の異常について気になることがあったのに対し、Yさんはなかった。学校からの通知に対してXさんは「やっぱり」と思い、Yさんは「ショック」を受けた。また、医師からの診断でXさんとYさんともに職業の制限についての説明を受け、Xさんは子どもの将来の職業選択に不安を感じ、Yさんは「戸惑い、ショックを受けた」と言っている。つまり、色覚について気になることがないほうが診断への衝撃が大きいということが言えた。このことから学校からの通知や医師からの診断に対するレディネスの有無が障害の受け止めを左右すると考えられた。そして、現在はXさんもYさんも子どもが色覚異常であることに対して「特に何もしなくていい」「さほど心配していない」と思っていた。現在、XさんとYさんの子どもであるAさん、Bさんともに大学院で自身が選んだ分野の研究を行っている。このように子どもの自立した姿が見えるかどうかは親の現在の心情に影響を与えると考えられた。

そして、目に見えにくい障害特有の困難については、やはり周囲の認識の少なさがあげられた。色覚異常者からは黒板のチョークの使い方を考えてほしいという語りが得られたことから、学校現場での色覚異常に関する配慮はあまりされていないことが推測される。また2003年度から学校での色覚検査が廃止されていることから、教師が色覚異常という障害を考える機会は減っているためなのかもしれない。教育現場での色覚異常者の困難を和らげるためにも教育者の色覚異常に対する認知度を高め

ることが必要であると考えられた。

本研究は、色覚異常者である4人とその親2人という少ない人数で研究を行ったため、本研究で明らかになったことをすべての人に共通する結果として言うことができないかもしれない。色覚異常の型や程度によっても見え方が異なるため、経験が異なり、本研究とは違った結果が出るという可能性もある。今後は、対象者の人数を増やし、色覚異常の型や程度を合わせ、量的な側面からも検討していきたい。

5. 参考文献

- 一瀬早百合 2011 障害のある乳幼児をもつ母親の変容プロセス—早期の段階における4つのストーリー—
社会福祉学研究52(2), 67-79
- 坂口美幸・別府哲 2007 就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造 特殊教育学研究45(3), 127-136
- 阪本啓二 2005 知的障害児・者の母親のストレス者についての一考察 精華女子短期大学紀要31, 1-8
- 田垣正晋 2004 中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか：脊椎損傷者のライフストーリーより
社会心理学研究19(3), 159-174
- 竹内紀子 2000 療育機関に通う発達障害児を持つ母親のメンタルヘルス 小児保健研究34(3), 23-32
- 辻京子・大西美智恵 2012 思春期に中途視覚障害となったA氏のエンパワメントの軌跡 日本保健福祉学会誌18(2), 29-37
- 山根隆宏 2012 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方との関連 発達心理学研究23(2), 145-157